

筑波山周辺における獣害対策—国松地区を事例に—

橋本 操 (地球環境科学専攻)

- 1. 研究背景・目的:**近年、野生動物による被害が全国的に報告されている。2008 年における茨城県のイノシシによる農作物被害は、イネの被害が最も多く 2、310 万円、次いで果樹 912 万円、イモ類 653 万円である。特に、近年は果樹、飼料作物の被害が増加する傾向にある(茨城県生活環境部環境政策課 2010)。以上より、本研究では、筑波山周辺で実施されている対策について周辺環境との分析により明らかにすることを目的とする。
- 2. 対象地域:**対象地域は、筑波山の麓地域の中でもつくば市の国松地区を対象地域とする(図1)。筑波山周辺では、イノシシの被害が年々増加しており、被害対策が実施されている(茨城県生活環境部環境政策課 2010)。つくば市の有害鳥獣捕獲数としては、2009年に27頭(わな22頭、銃5頭)から、2010年には41頭(わな30頭、銃11頭)と増加している。
- 3. 研究手法:**まず、GPS 端末を使用し、対策の実施場所および被害地点をウェイポイントとして記録した。さらに、対策実施場所の土地利用についても調べた。そして、ArcMap を用いて地図化するとともに、土地利用とクロス集計を行い分析した。
- 4. 結果・考察:**国松地区で行われている対策としては、電気柵(設置ヶ所 18)、トタン(同 24)、鉄柵による防護柵(同 9)、ネット(同 15)、箱わな(同 1)の設置であった(図1)。対策実施地点は、性山寺から北西部では、山に近い民家や畑、果樹で多くみられたが、南東部では、山に近い民家ではなく平地に近い畑

でみられる傾向があった。トタンは、対策として実施しやすく、また安価であるためか地区全体で設置されていた。電気柵は、性山寺から北西部に多く分布していた。防護柵は、地区全体をみても少なく、平地に近い場所に設置されている傾向があった。ネットは、性山寺から南東部で多く設置されていた。被害は、食痕、掘り返し、果樹の枝折りが確認され、周辺には足跡もあった。

対策を実施している場所の土地利用割合は、図2のようになった。トタン、防護柵、ネット、箱わなについては、畑で実施している割合が最も高くなっていた。一方、電気柵は、建物での設置が最も多く、次いで畑となっていた。電気柵は、他の対策よりも住宅での利用が多くなっているのは、電気柵の電力を家庭用の電源から取りやすいこと、住宅の近くでは管理がしやすいこと、住宅での被害が深刻であることなどが考えられた。これらの対策は、複合的な利用もみられた。しかし、電気柵と防護柵の組み合わせでの対策はみられなかった。理由としては、防護柵は鉄製であることが多く、電気柵と併用することで、感電や漏電の危険があり、材質として併用が難しいため、組み合わせとして設置がみられなかったものと考えられた。

- 5. 参考文献:**茨城県生活環境部環境政策課(2010)「茨城県イノシシ保護管理計画(改定)(特定鳥獣保護管理計画)」

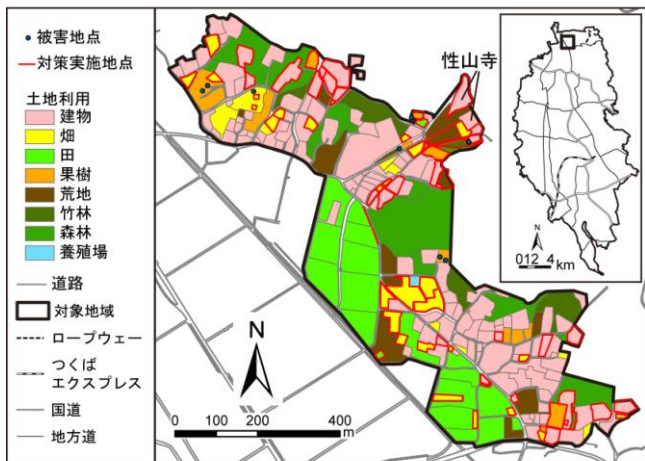


図1 被害地点, 対策実施地点および土地利用 (GPSデータ, 現地調査により作成)

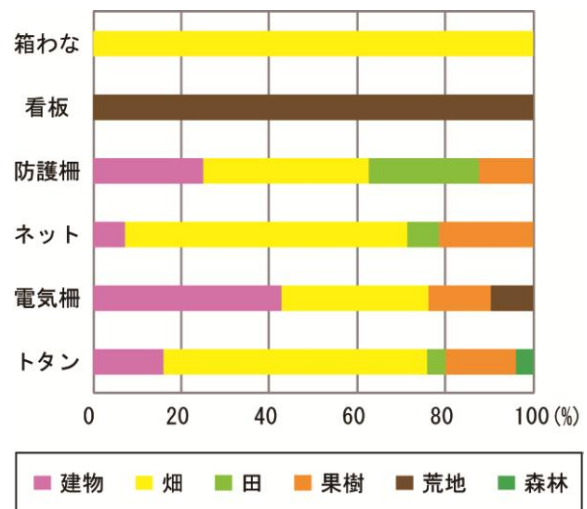


図2 対策の種類における土地利用割合